



あ 明けの空 ばしょう 芭蕉をみおくる 細い月

松尾芭蕉の『おくのほそ道』は、江戸時代に書かれた紀行文。江戸（東京）を出発して、東北・北陸地方を旅しました。足立区には、『おくのほそ道』の出発点の「千住」がありますから、ご存じの方も多いでしょう。

『おくのほそ道』には、旅立ちの日に月が見えていたことが書かれています。松尾芭蕉が出発したのは、元禄2年3月27日でした。これは、太陰暦の日付です。太陰暦は、月の満ち欠けをもとに作られる暦ですから「3月27日」を手掛かりにその日の月の形が判ります。

（太陰暦の「元禄2年3月27日」は、今の暦では「1689年5月16日」にあたります。）

5月16日は、「旅の日」。松尾芭蕉が千住を旅立った日を記念して制定されました。

弥生も末の七日 明ぼの空朧々として
 月は在明にて光をさまれる物から不二
 の峰 幽にみえて 上野谷中の花の梢
 又いつかはと 心ぼそし おつましき
 かぎりは宵よりつどひて舟に乗て送る
 千じゆと云所にて船をあがれば
 前途三千里のおもひ胸にふさがりて
 幻のちまたに離別の涙をそそく

『おくのほそ道』の旅立ちの最初の部分



芭蕉が旅立った日と同じ形の「二十七日月」。三日月とは逆向きで、明け方の東の空に見える。

2021年5月8日（太陰暦3月27日）記（解説員：小野 夏子 / 月の写真撮影：田中 千秋）